

《人血饅頭》と《人血ビスケット》

——「湖南の扇」について——

施 小 煒

魯迅の小説「藥」が雑誌『新青年』に掲載されたのは、一九一九年五月のことである。芥川龍之介訪中のちょうど二年前である。

「藥」は魯迅の創作としては、処女作「狂人日記」(一九一八年五月『新青年』)、「孔乙己」(一九一九年四月『新青年』)に続く三作目だが、三作いずれも短篇小説である。短い作品とは言え、中国の新文学運動の大きな成果であり、近代文学史の里程碑として高く評価されている。「藥」は四章からなり、一篇の核心は、斬首の刑に問われた若い革命家夏瑜(シヤユ)の血をしみこませた、肺病を直す特効があるといわれる「人血饅頭」である。夏瑜と同世代の青年華小栓(ハア・シヤウ・ソワン)はそれを焼いたのを「熱いうちに食う」たが、病魔は一向にたじろぐ気配を見せず、肺はついに治ることなく、結局翌年「西門外」の土饅頭と化して、「藥」を提供してくれた夏瑜の墓と狭い一本の小道を挟んで相對することになった。魯迅はここで、革命先驅者の犠牲に全く無理解、無関心な一般市民の愚昧を突いて、彼らに覚醒を呼びかけた。

無論、人血饅頭を食べるなどは、当時としても相当衝撃的な効

果をもたらした描写に違いない。少なくとも日本人にとってはそうだったはずである。たとえば桂頼三という、日本の軍艦々長として長年中国で活躍していた「帝國海軍」軍人が著した『長江十年』という書物がある。芥川龍之介が訪中準備の一環として読んだもので、訪中直前に書かれた短篇小説「奇遇」(大正十年四月)にも言及されているが、そこには人血饅頭にこそ触れていないものの、斬刑に関する記述があり、そして桂はそれを「支那人の残忍性の発露」の証左と見なし、嫌惡の情をあらわにしている。もともと、『長江十年』の著者によれば、「日本では活き物を殺すとしても、偶々活きた魚を料理する位のもので、甚だしき残酷なものとなど見られ」ないという。斬刑さえ容認できない姿勢だから、人血饅頭云々は、なおさら言語道斷で、けしからぬ惡弊とも見られたのであろう。

人血饅頭の描写は衝撃的なもので、一読した者にはかなり深い印象を与え、容易に忘れさせないことは、想像に難くない。ただし、大洋を隔てる日本にいた芥川龍之介が、この衝撃的な小説を

自ら読んでいたか否かは、確固たる証拠がないために、速断はできない。しかし、当時、雑誌『新青年』で「薬」をほぼリアルタイムに、あるいはやや遅れて読んでいた日本人がいたことは十分に推測される。まず、当然考えられるのは、中国現代文学の新しい動向に細かな注意を払う中国文学研究者たちである。次には中国に長期駐在のマスコミ関係者で、中国の新文学にも触手をのぼす人々も読んでいた可能性が高い。

たとえば、大阪毎日新聞社の北京特派員の波多野乾一はその一人であると推定できる。芥川は大阪毎日新聞社の海外視察員として中国を訪れたので、波多野は同じ社の同僚でもあり、北京においては東道の主として、芥川の北京滞在中に終始案内役を全うした人物である。彼は中国の京劇に特に造詣が深く、後年『支那劇大観』（大東出版社、昭和十五年）等著したこともあるほどで、芥川が『毎日支那服を着ては芝居まはりをしてゐ』（大正十年六月二十四日中国からの書簡）た時、常に同伴して解説した⁽²⁾。芥川訪中に先立って、大正十年二月、東京の支那問題社という出版社より『現代支那』と題する大部な本を上梓している。この本の中で、波多野は「文学革命」という一節を設けて、中国新文学運動の中心地である北京大学の運動状況を概説している。そして、勿論当時新思想の中心的存在であった雑誌『新青年』にも言及しており、「本誌は支那思想変遷史に関する最重要の權威を占む」と、高く評価していて、その雑誌の重要性を重視する姿勢には際立つものがある。まず、この波多野乾一という人物が、『新青年』誌上で魯迅の「薬」を「早く読んだ可能性が十分にありうる。

今一人、大阪毎日新聞社上海支局長を勤めていた村田孜郎（号は烏江）も「薬」を読んだかも知れない人物である。芥川訪中の際、彼は上海ばかりではなく、杭州まで伴って行き、通訳兼案内役をつとめた。その名はしばしば「上海遊記」や「江南遊記」にも登場する。そして、芥川によれば、彼も波多野乾一同様に、京劇に精通しており、上海の小有天という酒樓の樓上で酒食と余興を樂しむ席上、「村田君が突然立ち上がりながら『八月十五、月光明』と西皮調の武家坡』をうたい始めて、芥川を一驚させたほどの実力を持っていたという⁽³⁾。それもそのはず、實際村田はすでに『支那劇と梅蘭芳』（玄文社、大正八年）という著書を出し、記者という本職のかたわら、京劇研究にも没頭していたらしい。また、波多野の前出『現代支那』には、同じ新聞社の同僚である村田について、日本が上海に設立した、中国研究者を養成することを目的とする四年制大学東亜同文書院での学友であったと記されている。このように、東亜同文書院を卒業し、長年中国に暮らし、生涯中国を観察しつづけた村田孜郎（彼は戦後上海で客死）が、自ら『新青年』で直接小説「薬」を読んだ、あるいは「学友」の波多野乾一より「人血饅頭」の話を吹き込まれたと推理しても、はなはだ突飛な憶測とは言えないであろう。

また、芥川が残した書簡には、沢村幸夫という人物に宛てた手紙が三通ある。そのうち二通は訪中直前に書いたもので、中国古典文学関係の書籍を貸してもらった謝状か、あるいは中国の「誨淫の書」について「御教示を願う」内容のものである。どうやら沢村はこうした中国の古典に詳しいだけでなく、現代中国の事情

にもすこぶる詳しいようで、芥川の訪中スケジュールの作成にもかかわっていた。現に芥川本人が「上海游記」において、「このホテル（名は東亜洋行。韓国の親日派大物政治家金玉均はここで暗殺された——施注）を私の宿にしたのは、大阪の社の沢村君の考案によつたものだ」と記している。この人もまたジャーナリストであると同時に、中国ウォッチャーの一人でもある。彼も後に（昭和四年）上海に渡り、長年駐在して、『支那人士録』（大阪毎日新聞社、昭和四年）や『上海風土記』（上海日報社、昭和六年）等中国関係の著書を著した。そして、後者において、たとえば次のような記述がある。

胡適よりも革命的であり、個人主義的であるといはれてゐる批評家、創作家の魯迅、即ち周建人（誤植。正しきは樹人。建人はその三弟の名——施注）は北四川路に近い処に住む。鶏を縛る力もない文人なのに、兎角、官憲から睨まれることが多く、警戒の門扉をいつも固く鎖してをる。

創作の目ぼしいものも少ない。が、この間にあつて魯迅氏ひとり光輝を減ぜず、かいなでの創作評論家の原稿料は、一千字五元乃至十元を普通とするのに、（中略）この人は破格の十五元。

こういうふうに、魯迅の消息を伝えている。さらに、

逮捕令をくつた人々の中には、（中略）周樹人の魯迅がある。かれは幸に逸早く姿をくらましたので無事だったが、瘦せかけたかれの細首に、三万元の懸賞金がぶらさがつてゐる。

と、文壇恐怖時代の魯迅の動静を克明に記していて、魯迅への著者の関心度の高いことを物語っている。

実際、沢村幸夫の中国現代文学に対する一方ならぬ関心は、渡中前から培われたものであった。大正九年五月三十日大阪毎日新聞紙上に掲載された「支那の文学革命運動」という、おそらく日本における中国現代文学研究、あるいは紹介の嚆矢とも言うべき長文は、ほかならぬこの沢村幸夫の筆になるものであった。因みに、同日、同紙の一面には、当時連載中であつた芥川作「素戔嗚尊」第三十九回が掲載されている。沢村はこの文中において、魯迅という名にこそ触れていないものの、当時台頭しつつある中国の文学革命運動の概況を紹介している。このように、常に最新の文学動向に細心な注意を払っているばかりでなく、彼は中国の情報を手に入れるための多くの知人を持っていたので、芥川が上海滞在中にも、方々で沢村とパイプを持つ人々に会つたらしい。このような沢村であつてみれば、「薬」の人の血饅頭の知識をも掴んでいたとしても、一向に不思議ではない。

以上の三人は、いずれも芥川訪中前後乃至はその中国滞在中に頻繁に芥川と接触を保っていた人物である。その上、時期も時期なので、彼らの間で交わされた会話に中国に関する話題が多く、その中に文学談義が含まれていたことも想像される。こうした状況の中、三人のうちの誰かが魯迅の「薬」についての知識を有し、その知識を芥川に伝えた可能性も少なくないと思われる。そして、その知識の核心には、「人血饅頭」の一語があり、たとえばストーリーの具体的な展開などについては、記憶が薄れることがあつて

も、この「人血饅頭」ということばだけは、時が立つても鮮明に脳裏に焼き付き、容易に忘れられるものではなかっただろう。

つまり、芥川龍之介は訪中前の準備段階か、中国滞在中という最も中国に興味と注意を集中している時期に、文壇最新動向を含め、中国の事情に詳しい現地在住の観察家、あるいは日本にいながら常にアンテナを中国に向けている研究者から、魯迅とその短篇小説「薬」の話を聴かされ、「人血饅頭」ということばを大脳皮質の片隅に植え込まれた、ということではないのか。そして、この「人血饅頭」は、四年後に、「人血ビスケット」として、中国土産小説「湖南の扇」に登場したというのが私の仮説である。

周知のように、芥川にはいわゆる中国土産小説——ここでは中国体験に基づき、舞台や主要人物がともに中国都市や中国人だというものを指したい——は、この「湖南の扇」たった一篇のみである。「百二十余日」に及ぶ中国旅行中に、上海には一箇月半、北京には一箇月滞在したのを始め、そのほか蘇州、杭州、揚州、鎮江、南京、蕪湖、九江、漢口、洛陽、大同、天津など、十数の都市にも訪問滞在していた。「湖南の扇」では五月十六日午後四時に長沙着、五月十九日午後七時半ごろ長沙を立つというように、三泊四日に設定されているが、芥川の実際の長沙滞在は、二泊三日——五月三十日に漢口から出発して長沙に赴き、六月一日に漢口にもどっている——しかなく、いわば匆匆一過、特に目立つものではない。『支那遊記』にもわずか十数行しか記録が残されていない。「雑信一束」の「長沙」と「学校」。しかもこの「雑信一束」は単行本『支那遊記』に初めて収められたもので、それまで

発表したことはない。特筆すべき体験もさほどないようだ。それなのに唯一の中国旅行土産小説に、ほかではなく、この湖南省の長沙を舞台に選んだのである。何故だろうか。

まず、この間に答える前に、なにゆえ芥川が湖南の長沙まで行くかと思うようになったのかを考えてみたい。芥川の中国旅行地図を見れば分かることだが、長沙行は旅の順路からはずれており、いわば枝道なのである。

『支那遊記』に収められた前出「雑信一束」に記された長沙の旅の印象は、次の二つのエピソードに収斂される。すなわち、往來での死刑執行と女学生たちの排日行為である。両者ともかなり印象深かったようで、「湖南の扇」にも活用されている。前者の「死刑執行」は、いうまでもなく土匪黄六一たちの「斬罪」として具体化されており、後者は、直接的に描かれることなく、遠景化されているが、前日に見た「女学校」の「排日的空氣」として言及されている。無論これらは長沙行の収穫だと言わなければならないが、しかしこれは旅の結果であり、長沙行の動機を説明することにはならない。

訪中直前に書いた、前にも触れた小説「奇遇」の冒頭に、「編輯者」と芥川自身とおぼしき「小説家」間のユーモラスな対話があつて、その中には次のようなやりとりがある。

編輯者 準備はもう出来たのですか。

小説家 大抵出来ました。唯読む筈だった紀行や地誌などが、未だに読み切れないのに弱つてゐます。

編輯者 (氣がなさそうに) そんな本が何冊もあるのです

か？

小説家 存外ありますよ。日本人が書いたのでは、七十八日遊記、支那文明記、支那漫遊記、支那佛教遺物、支那風俗、支那人氣質、燕山楚水、蘇浙小観、北清見聞録、長江十年、(中略) 湖南、(中略) ——

編輯者 それをみんな読んだのですか？

小説家 何、まだ一冊も読まないのです。(傍点施)

勿論、「まだ一冊も読まないのです」云々は、真実ではないだろう。われわれはむしろ芥川の訪中準備の細密周到さ、そしてその準備としてどんな書物を集めたか、これによって分かるわけである。芥川の読書速度なら、たとえそれらの書物の全部でなくても、少くともその大半は眼を通してに違いない。中でも特に注目に値するのは、「湖南」という大冊である。

安井正太郎編著、明治三十八年東京館発行のこの本は、いわば「地誌」の類のもので、湖南省の地理、沿革、産業、名勝、人物、何から何まで詳細に紹介している。冒頭の「総論」において、次のように湖南人の性格を解説している。

舊記に曰く、湖南は土風純ら古にして世利に淡に、其俗多くは慷慨節を尚び而して不義を為すを恥づ、學者は禮に勤め耕者は力に勤む。故に甚だ富むもの無しと雖も亦甚だ貧しきもの無しと、この数語は湖南人の性情を盡して能く其真を得たるものと云ふべし。

さらに、同「総論」には次のような注目すべき一節がある。

其土人の禮に厚く民風の樸実にして、貧富の懸隔甚しから

ず、稀に乞糶の徒を見るが如き、街路の整然として不潔を委棄することなきが如き、之を清国中何れの地方に求むるも見るを得べからず、さらにその士人に接するに及びては、簡率勁直わが古武士の風あり(中略) 日本人が湖南人を敬愛して自然に相親しまんとするは蓋し偶然にあらずといふべし。

彼等も亦その日本人に彷彿たるものあるを知り、或は湖南を以て我鹿兒島に擬し或は湖南省を目して小日本となせり、前の巡撫趙爾巽の長沙学堂に於ける演説中に卿等は自ら稱して小日本人といふ、卿等は維新の俊傑西郷隆盛あるを知らんと説き出せるが如き、彼等の眼中の西郷隆盛は、猶吾人が少時史を讀て曾國藩を欽仰せる所の如し。

つまるところ、湖南は理想郷である上に、湖南人は大の親日派であり、湖南は中国の中の日本だ、という論調である。こんなすばらしい所は、もし本当に存在するならば、日本人旅行客には当然魅力的であつたろうし、機会があれば誰でも一目見ておきたいと思つたに違ひないはずである。おそらくこの本を読んだことが、芥川の長沙行を想いついた有力な一つの理由ではなかつたと推測される。

また、先に引用した「湖南人性情論」も「湖南の扇」成立のために大きな意義があつたように思われる。「湖南の扇」冒頭部に次のようにある。

廣東に生まれた孫逸仙等を除けば、目ぼしい支那の革命家は、——黄興、蔡鍔、宋教仁等はいづれも湖南に生まれてゐる。これは勿論曾國藩や張之洞の感化にもよつたものであろ

う。しかしその感化を説明するためにはやはり湖南の民自身の負けぬ気の強いことも考へなければならぬ。僕は湖南へ旅行した時、偶然ちよつと小説じみた下の小事件に遭遇した。

この小事件もことによると、情熱に富んだ湖南の民の面目を示すことなのかも知れない。……

一篇のモチーフともなるこの芥川の「湖南人情熱説」とでも称すべき、湖南人に対する認識は、一体どこから芥川が獲得したのであろうか。前述したように、芥川の長沙滞在はわずかに二泊三日という大変短いもので、『支那遊記』をめぐるかぎり、その間特にこうした認識につながるような感銘を受けたことはなかったようである。勿論そこには湖南人論の展開も全然示されておらず、一体ここに提示されたような認識をどこから得たのであろうか。そこで想い合わされるのは、『湖南』の「湖南人性情論」が説くところの「其の俗多くは慷慨節を尚び而して不義を為すを恥づ」ということばである。両者を照し合わせてみれば明らかなように、そこに何らかの影響関係があったのではないかと思われる。少なくとも湖南人を気性の激しい、情熱に富んだ、倫理的に潔癖な人種と見ている点で、両者は共通しているのである。

さらに、『湖南』には附録として、英国人モルテマー・オーソリヴァンの書いた「湖南省探検旅行記 (Report of a Journey of exploration in Hunan)」が翻訳収録されている。この旅行記はたびたび実例をあげながら湖南人性格の激しいことに言及している。

聞く所に因れば、兼て卓越したる能吏の稱ある現任巡撫の

長沙に來任する以前、支那皇帝は他の人を勅任して此地に巡撫たらしめたり、然るに同人の來任する以前に湖南人民は同人に關する不良の報告を耳にしたりしかは、其來任して主府に到着するの日多數の土民は氏を歡迎するに先ち、豫め、氏が巡撫としての適否を定めんと目的を以て、氏の乗輜及從者を郊外に擁留し其進行を止め、支那的觀相法に依り同人の顔貌を瞬時注視した後ち、氏を以て湖南巡撫たるに適したる人にあらずとなし、直に其郷里に逐還すべきことを決定したりき、實に湖南人民は己の嫌惡する所のものには對しては嚴格にして且冷酷なる性情を有せり。

(傍点施)

これはある意味で革命じみた騒動だといってよからう。さらにこんな記述もある。

且又余の長沙滞在中人民が屢々滿朝政府焉そ余輩を征服し得へけんやと、得意に揚言するを聞きたるのみならず、屢々外國人の面前に於て皇帝並に西太后を輕侮するの言語を發する者を見たり、余の長沙出發の日湖南產の一武官あり、余に對して其市を圍繞する城壁を指點し、傲然として曰く「未だ曾て一満人の此城壁を越へ得たる者あらず又余輩は未だ曾て満人守備兵の我城内に鎮守するを許したることなし」と。

(傍点施)

今度のは、まぎれもない造反、謀反の言論と受け取ることができ。民衆の反清革命の気炎の激昂が躍如として伝えられている。オーソリヴァンの湖南探検旅行は一八九七年十二月より翌年三月にわたっておこなわれたものであり、辛亥革命（一九一一年）より

早いこと十四年である。その時民心はもはや清王朝から離叛して、清王朝を覆す基盤はすでに民衆のレベルで確立していたことを物語っている。こうした記録を視野に入れて翻って「目ぼしい支那の革命家は（中略）いづれも湖南に生まれてゐる」との指摘を見ると、その発言の拠るところがなかったわけではないことを改めて感じさせられる。——黄興、蔡鍔、宋教仁等「湖南の廟」の作者が挙げた革命家の名前は、いずれも反清革命家だからである。

のみならず、この探検旅行記には、排日ならぬ排外についての詳細な記述も少なからずある。

抑も宣教師が唯一の目的とする所はその伝道の基礎を湖南省中に建造するにあり、而して人民は皆に全力を盡きて之に抵抗し、聖教の使徒をして其の足跡を省中に印せしめざることを勉むるのみならず、更に進で敵の本營に肉薄して戦を挑撥するの挙動をなすに至れり、実に排耶蘇教熱否寧ろ排外国人熱の熾なることは彼の有名な周瀚の基督教攻撃に徴して知るべく、（中略）之を要するに今日に至る迄、湖南の人民は、支那帝国内に於ける最も排外人の熱血を有し、且牢固なる保守的志想を有する人民の根源なりとす。（傍点施）

さらに、具体的な人名をも挙げている。

又昨年外国の一紳士は探検の目的を以て湘江流域に航せしに、其目的は全く失敗に了りたるのみならず、余の聞く所に因れば同紳士は非常なる迫害と冷酷なる待遇を受けたるものの如し。近來支那内地旅行に多くの経験を有する漢口在留の

神学士グレフ井ス、ジョーン及神学士シー、ビー、シバーハム二氏は湘江流域視察の途に上りしが、終に上陸すること能はずして其探検を中止したるのみならず、氏等の搭載したる民船の傍には、支那軍艦を備へ、且官吏の嚴重に護衛し居るにも拘はらず、投石の乱下を免かれざりしてシバーハム氏は余に語れり。

以来、いく星霜を閲して、政權が変わり、清王朝は終に崩壊し、中華民國が樹立した。しかしながら、わずかに泊三日の滞在中に芥川が強く感じたのは、オーソリヴァンの時と変わらぬ排外的空気だった。ただ今度は日本が西洋諸国に取って代わって、かつて「小日本人」と自称していた人々の排除の標的になっただけのことである。この事実を考えると、芥川の長沙への旅はあたかもオーソリヴァンの記述を確認するための旅行と見ることもできるようだ。オーソリヴァンの時代の排外から、芥川の時代の排日への二十数年間には、勿論二十一箇条要求など、日本が利権拡大をもくろんだ侵略行為が白熱化していたことは言うまでもない。したがって、当初は日本に親近感を持ち、羨慕の念を抱き、「小日本」と自任していた湖南の人々は、一九二一年の時点においてはすでに帝国主義列強の仲間に入り、対中侵略の急先鋒と化しつつあった日本には、失望し始めていた。昔日の東洋民族としての連帯感、さらには東洋民族でありながら逸早く西洋列強の植民地に淪落する危機を抜け出した事実に基づく好感をかなぐり捨てて、いわゆる「親日派」から一転して、「排日のために」女学生たちも皆日本製の「鉛筆や何かを使はない」というふう、豹変ぶり

を示した。そして折から訪ねてきた芥川に、不幸にも「存外烈しい排日的空氣に不快を感じ」せしめたわけである。いわば、地誌『湖南』によって作り上げられた「湖南人」という典型を裏付けたような事実を、芥川が自らの目で確かめたのである。

そこで、「革命家」を輩出させた「湖南の民自身」の「負けぬ氣の強いこと」と「情熱に富んだ」「面目を示す」ために、芥川が提示したのは、美人芸者の玉蘭が、大勢の見守る前で、歯並びのきれいな、その「エナメルのような歯を光らせて、自分の情夫で、首を斬られた土匪の頭目だった黄六一の血をしみこませたビスケットを噛みくだして食べたという衝撃的なシーンである。

「薬」の肺病人の華小栓とは違い、玉蘭はいとも健康な体格の持ち主で、へ人血ビスケットを食べることは、実用的な目的をもったものでは全くない。ここで、芥川は『湖南』の延長線上に沿った湖南人の典型を仕上げたような観がある。しかももつと過激的に。

勿論、解釈の仕様によつては、玉蘭のこうした言動は「湖南の民の負けぬ氣」と「情熱」の証明として取られないことはない。そして同時にまた、これを「湖南人民は己の懷惠する所のものに對しては厳格にして且冷酷なる性格を有」して、「慷慨節を尚び而して不義を為すを恥づ」ることの証と見なしても差し支えないと思う。さらに、この玉蘭の「情熱」の内実をつきつめれば、それは彼女をいじめようとする、彼女にとってたまさしく「不義」の徒たちに反撥して、その裏をかこうとする、一種の「片意地」に近いものだ、とも言えるようだ。そして、このような「片意

地」は、実は小説の語り手である「僕」にも通ずるものである。

「さあ、土匪の斬罪か何か見物でも出来りや格別だが、……」

僕はかう答へながら、内心長沙の人譚永年の顔をしかめるのを豫想してゐた。

(傍点施)

僕は誰にでも急つかれると、一層何かとこたはり易い親譲りの片意地を持ち合わせてゐた。

(傍点施)

僕は彼の注文通り、驚嘆する訣には行かなかつた。

このように、「僕」という男の「片意地」は実に並大抵のものではない。「僕」の語り口もひねくれている。この片意地な、ひねくれた旅行者「僕」のイメージは、あのいつも周囲の物事に反撥しがちで、「つまらない」を連発して、自分の想うことを素直に表出するのを好まず、いかにも「片意地」がありそうな、ひねくれた感じのする『支那游記』の主人公である「私」の面影にも重なっている。

「湖南の扇」において、「僕」は存分に「親譲りの片意地」を発揮して、「譚永年」の裏ばかりをかく。しかし結尾においては、「僕」を含めて全員が玉蘭の片意地に裏をかれてしまう。そして「湖南の扇」という標題を見て、無意識のうちに扇にまつわるロマンチックな話を期待する読者のわれわれは、小説を読み終わると、何となく期待がはずれて、作者に裏をかれた感じに囚われがちである。「湖南の扇」はこうして、正に裏をかく小説の様

相を呈している。この裏をかく行為を促すものは、とりもなおさず、「僕」の「片意地」にはかならず、そしてこの「片意地」こそが、「僕」に玉蘭を湖南人の情熱を立証する「典型」に選ばしめたものなのである。

小説中、「僕」の長沙滞在の日は、芥川が実際に長沙を訪ね、滞在していた日時とズレがあり、虚構であることは、すでに述べたとおりである。一方、長沙っ子でありながら玉蘭とは性格上対照的な譚永年も、実は架空の人物である。小説では、この譚永年は「湖南の産」(傍点施)で、「僕」と同期に一高から東京帝大の医科に進学したという設定になっている。さらに菊地寛という実在人物の「譚永年論」を引き合いに出して、「譚」をいかにも実在した人のように見せかける細工を施している。ところが、第一高等学校発行の『第一高等学校一覽 自大正二年至大正三年』をひもとくと、たしかに芥川龍之介と同期に卒業した医科志望の中国人留学生が一人いたことは間違いないが、しかしそれは「戒肇敏」という人物で、私が調査したところ、残念ながらこの人は「湖南の産」ではない。というのは、同校発行の『第一高等学校一覽 自大正元年至大正二年』をひもといてみたところ、「第三部外国人特別入学生名簿」に「戎肇敏」という名前が見付かり、出身地は「支那浙江」と明記されているからである。この二人は同一人物だと断定してよいと思う。中国には「戎」という姓は少なくないが、「戒」は姓としては非常に珍しいので、前記「一覽」の自大正二年至大正三年分は誤植であると思われる。勿論、「譚永年」の記載はどこにも見当たらず、大正十(一九二一)年

五月三十日か六月一日まで芥川龍之介が長沙に滞在していた間に、「譚永年」という一高、東大に留学した中国人が病氣中の「同社のBさん」の代役として案内役を勤めたことはあり得ないのである。したがって、「譚永年」の案内兼通訳で妓館を訪れたことも、そこで「玉蘭」という芸者が「譚」などにいじめられ、「人血ビスケット」を食べた場面を目撃したことも完全にフィクションだと判断して間違いないようだ。小説中で大きな役目を担う「人血ビスケット」という小道具の源をつきつめると、それはやはり魯迅の「人血饅頭」に行きつくわけで、そしてその「人血ビスケット」をかじる、湖南人としての「玉蘭」の「片意地」のイメージは、訪中準備のために目を通した「湖南」にその淵源があるようだ。古今東西のあらゆる書物から、自己の物語を織り成した芥川龍之介の手法に照らして、「湖南の扇」もその例外ではなかったと言ふことができるだろう。

注(1) 「僕は大阪毎日新聞社の命を受け、大正十年三月下旬から同年七月上旬に至る一百二十余日の間に上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等を遍歴した。」芥川龍之介、「支那游記」序。

(2) 芥川龍之介、「北京日記抄」参照。なお、同文によれば、波多野にはこの頃すでに『支那劇五百番』の著書がある。

(3) 「上海游記」十六、南国美人(中)。

(4) 「何処へ行つても必ず人が沢村さんから手紙が来ました」と云ひます。大正十年四月三十日上海より沢村幸夫宛芥川書簡。

(5) たとえば衆知の如く、芥川家の主治医で龍之介の友人でもある下嶋敷は、龍之介の驚異的な読書速度に関する証言を残しており、

それによれば「英文の書物」は「一日千二百ページは軽い」、「日本語の本なら三、四人と話をしながらも読めちゃう」と、龍之介

が自らいつていたという。

新刊紹介

中島国彦・長島裕子著

『夏目漱石の手紙』

本書は、数多い漱石の書簡から二十八を厳選し、それぞれに丁寧な解説及び論考を附記したもの。冒頭に、手紙を通じて漱石という人に迫るという本書全体を貫く動機を提示し、以下、明治二十三年から大正五年までを大きく四つの時期に区分する構成を取り、それぞれ「狂」を見つめて「異国での転機」「作家への転身」「道」を求めて」と題している。

著者は書簡の体裁や文体、そして人称といった差出人と受取人の間の繊細な息づかい等を緻密に辿ることで、漱石自身の書くことによる内省をそとと浮かび上がらせている。これら編集された断片は決して作家像を固定させるものではなく、著者と漱石との間の呼吸を緩やかに示しながら開かれて置かれている。研究者に限らず読者が好きな所から入り込んでいける、そんな楽しい仕上がりは、本書の大きな魅力のひとつと言えるだろう。

(一九九四・四 大修館書店 四六判 二六四頁 二一〇〇円)

〔加藤 禎行〕

久保田芳太郎著

『漱石―その志向するもの―』

本書は、著者の二十年に渡る漱石についての

研究を纏めあげた労作。巻頭の概論について『夢十夜』論、そして『吾輩は猫である』に始まる漱石の代表的な長篇についての論考が配列される構成となっている。

巻頭の概論「漱石、東と西についての一考察——ことばの論理と倫理——」は、漱石における「異文化同士の背反と統一」、「それぞれの民族と文化及び社会構造の独自性と普遍性の問題」を表明する。これが漱石自身とその作品における「倫理」「エロス」「罪」などの主題を顕在化させ、著者の論考を一貫する動機となっている。

漱石自身、数多く西欧の文献に触れた作家だが、著者は周到にその痕跡を確認し、さらには現在の「異文化」(ボーヴォワール、バタイユ、ブルデュー他)をも鋭く作品に突き付ける。その緊張感は、「異文化」という問題に対する著者の持続的なアクチュアリティを示している、と言えよう。

(一九九四・一二 三弥井書店 四六判 三〇〇頁 三五〇〇円) 〔加藤 禎行〕

矢部彰著

『森鷗外 明治四十年代の文学』

『森鷗外 教育の視座』(平三・一)に続く鷗外論集。「豊熟の時代」といわれる鷗外の明治四十年代の文業を考えるうえで逸することのできない、「追憶」「斗塔・セクスアリス」「青年」「蛇」「カズイスチカ」「妄想」「雁」「灰燼」を取り上げ、鷗外にとつての「書くこと」の内実が追尋

される。それはとりわけ、日露戦後の時代状況の中、「公」の世界に身を置き、「国家」や「社会」の問題に直面して苦悶しつつも、「人類文明の危機を超克」し、「個」の生の「再生」を期す姿(『青年』論上)として描き出される。さらに「父」と「子」の関係、「学問」「科学」「理性」への信頼といった問題も丹念に跡付けられる。それぞれの論の中で、著者は常に対象テクストに自閉せず、例えば「追憶」では「懇親会」や「大発見」、「青年」論では「我百首」、「雁」論では「寂しき人々」という具合に、鷗外自身の周辺作品や翻訳を横糸に織り込んで総体的な理解を試み、あるいは「蛇」を論じる際に、従来の「半日」を重ねるといふやり方だけではなく、「斗塔・セクスアリス」との関連性をも考察の範疇に含めるといった、本書でビック・アップされたテクスト同士の往還にも意を払い、当時の鷗外のモチーフが一貫して鮮明に浮き上がる仕掛けが施されている。

ほぼ半分が書き下ろしで、重厚な論の並ぶ、著者の「新しい出発を記念する」書。

(一九九五・四 近代文藝社 四六判 四四八頁 三〇〇〇円) 〔井上 優〕